

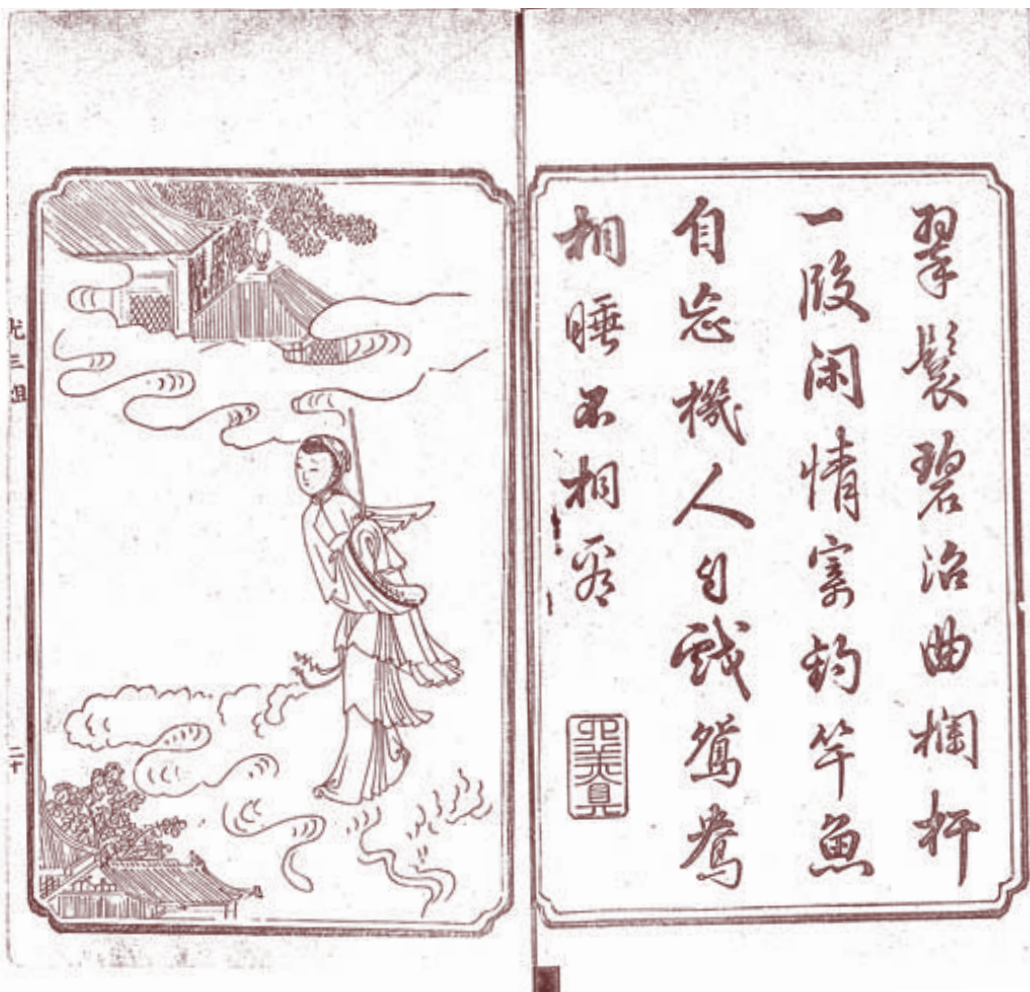
# 明日の 東洋学

Research and Information Center for Asian Studies (RICAS)  
Institute of Oriental Culture, University of Tokyo

特色ある図書館  
大木 康

最近の中国と漢籍について  
橋本 秀美

国際連携漢籍資料庫の夢  
丘山 新



【紅樓夢】書影

(乾隆五十七年萃文書屋木活字印本。東洋文化研究所倉石文庫蔵。「程乙本」)  
贊は前葉に付く

# 特色ある図書館

大木 康

理想の図書館とは何であろうか。古今東西のありとあらゆる書物が収蔵されていて、いつでも容易にアクセスすることができる。そんな図書館があったら便利ではあろう。しかし、それは物理的に不可能な夢である。最近の電子化技術の進歩（いわゆるバーチャル図書館など）により、たしかに夢の一端は実現されつつある。とはいっても、古今東西すべての書物を集めるとなると、目標は遙か彼方であるし、しかもしょせんは画面の上の幻影にすぎず、書物の香りや手触りを味わうことはできない。

もちろん一つの図書館に必ずしもすべての書物が収蔵されていなくてもかまわない。それこそ最近の電子化の進歩によって、各館ごとに編纂されている目録を一つ一つ調べ、あるいは実際に図書館に赴いてカードを一枚一枚くって見、目指す書物を探していたかつての時代に比べれば、書物の検索は格段に容易になった。しかも、相互貸借などのシステムも整備され、一つの図書館にすべての書物を備えている必要性自体が少なくなっているといつてよい。

それに加えて、近年は図書購入の予算がしだいに減少しているというマイナス要素もある。あるいは図書を購入することはできても、それを置く書庫スペースがすでに満杯であって、結果的に図書をふんだんに購入することが難しくなっている。

では、これからの図書館はどのような道を目指すべきなのか。もちろん、ひとくちに図書館といっても、さまざまな性格の図書館があり、それらを一概に論ずることはできない。例えば、広くさまざまな読者に対応しなければならない公立の公共図書館などの場合はまた別の話になってくるであろうし、大学図書館でも、文科系から理科系まであらゆる教師学生が利用する全学図書館の場合には、また別の対応が必要であろう。しかし、もともと専門分野によって区切られている部局図書館（部局といっても、これまたその中で、日本文学、中国文学、フランス文学などそれぞれ事情は異なるであろうが）の場合、いわば一種の専門図書館化こそが、これからの部局図書館の道ではないかと思われる。

たとえ一つの分野（日本文学とか中国文学とか）に限ったとしても、ありとあらゆる書物を集めることはもとより不可能なのだから、個々の図書館は、より専門的に特化した図書館になり、その上で相互の横の連絡を密にする。そんなイメージである。

専門の研究の世界に入ってゆけばゆくほど、ない書物はないのであって、ない書物を見るためには、どうしても日本中、あるいは世界中をかけまわらなければ

ならない。それがまた楽しみでもある。自分の机に向かったままで、古今東西ありとあらゆる書物にアクセスできてしまったら、それはまたどうにも味気ない。たった一冊の本を見るために、日本国内の各地に、あるいは中国へ、あるいはアメリカへ、ヨーロッパへ、その楽しみがなくなることはあるまい。以前、静嘉堂文庫で米山寅太郎先生からうかがったことばが忘れられない。「どれだけ遠くへでも手間暇かけて本を見に行くということは、若いころから習慣になっていないとだめです。」

かつては、目録の上で見て、遠くにある本は、しかたがないやということ許されもしたが、これもグローバル化というのだろうか、これだけ地球が狭くなってしまうと、パリにあるから見られなかったといういいわけが通用しなくなった。

閑話休題。図書館の理想に話を戻せば、もちろんあるべき図書館の大前提として、汎用性の高い基礎的な書物については、充実していることが必要である。わたしが広島大学に奉職していた時、当時の文学部中国文学研究室の主任であった横田輝俊先生が、われわれは『詩経』『楚辞』から現代文学まで、中国文学のあらゆる世界に通じていなければならない。その上で、一つの特化した専門を持つべきだ、といわれたのを覚えている。横田先生のご専門は、明代詩文研究である。図書館のあるべき姿もそれと通じるのではないかと思う。幅広く基礎的な資料は完備されている。その上で、世界に一つを誇れるような特殊コレクションがある。

ここからは、いささか宣伝めくのだが、わが東洋文化研究所の図書館は、上に述べたような図書館の理想を、これまでも実現し、これからもさらにその道を歩みつつあるのではないかと思われる。ここで簡単にその様子を紹介してみることにしたい。

東洋文化研究所の創立は1941年である。だが、その図書の歴史は、1927年に設立された東方文化学院東京研究所にまでさかのぼる。義和団事件の賠償金を文化事業に役立てんがため、東京と京都に中国研究所が設立された。その創設は、今でいうCOEなどをもはるかに上回る大事業で、東京研究所、京都研究所では、それぞれ関係資料を購入した。中国学研究の基礎となる漢籍について、東京では上海の蔵書家徐則恂の東海蔵書楼、京都では天津の陶湘の蔵書を購入し、その基礎を定めた。それぞれ経史子集及び叢書にわたる幅広い蔵書を持つ。

東方文化学院は、戦後の1949年、外務省から東京大学東洋文化研究所に吸収され、図書の寄託を受けた。

本所についていえば、旧東方文化学院の蔵書によって、中国学研究の幅広い分野にわたる基礎的蔵書が確保されているとあってよい。次は、特色の方である。

東洋文化研究所では、設立直後の1943年に、大木幹一氏所蔵図書の一部を寄贈を受けている。大木文庫である。大木文庫は、北京で弁護士をしておられた大木幹一氏が集められた蔵書であり、ひろく経史子集にわたりつつ、同氏の専門を反映して、中国の制度史、法制史関係のきわめて充実したコレクションである。経史子集によって分類した場合、史部の職官類、政書類などが極端に肥大化し、アンバランスになることを避け、大きく内篇と外篇とに分け、内篇として制度法制関係の書物をまとめ、その他の経史子集の書物を外篇としている。法制関係資料としては、国内はもとより国際的に見ても、類例の少ない貴重なコレクションであり、本所図書館が世界に誇る文庫である。

1951年から受け入れを開始した長澤規矩也教授旧蔵の双紅堂文庫も特色ある文庫である。書誌学の大家である長澤氏は、自身多くの漢籍を収集しておられた。その蔵書の大部分は、現在関西大学図書館に収蔵されている。本図書館に収蔵されているのは、その旧蔵書のうち、戯曲、小説に関わる部分である。「双紅」の名は、同氏が所蔵しておられた『紅樓夢』と『嬌紅記』（孟称舜作の戯曲）の二つの善本にちなむ。ただ残念ながら、本尊にあたるこの二書は、現在ここには収蔵されず、京都大学文学部の図書館に収蔵されている。戯曲部分には、長澤氏が北京で購入された貴重な芸能のテキスト（鈔本）を多く含み、小説部分についても『三教偶拈』などいくつか絶海の孤本を含む。

仁井田文庫。本研究所創設時のメンバーの一人であり、中国法制史の権威である仁井田陞教授の旧蔵書。同氏『支那身分法史』では、いわゆる法制資料ばかりではなく、家族関係、人間関係が生な形であられる戯曲小説なども資料として用いておられたことから、小説戯曲関係の資料が少なくないのが一つの特色である。また、いわゆる「日用類書」を法制史資料として用いられ、それらの収蔵に富むことも特色といえる。そのうち『五車拔錦』『三台万用正宗』は、『中国日用類書集成』（汲古書院刊）に影印されている。文庫には、仁井田教授自身の著書も収蔵されているが、すでに刊行されている著書におびただしい量にのぼる書き込みを行い、訂正のために備えていたさまがうかがわれ、迫力がある。

倉石文庫。本学文学部中国文学研究室の倉石武四郎教授の旧蔵書。1975年から受け入れを開始した。経史

子集にわたる幅広いコレクションであるが、同教授の専門であった清朝漢学関係の書物、とりわけ清人の文集のコレクションは壮観である。倉石教授の蒐書には、とにかく中国のあらゆる分野の書物を集めようとの意気込みが感じられる。なかでも注目されるのは、中国において二十世紀に入って注目を集めるようになった戯曲小説などの俗文学関係の資料であって、こうした資料までもが豊富に集められている。文庫には中国小説についての最初の目録である孫楷第の『中国通俗小説書目』の初版本が収められており、それには孫楷第自身の署名があって、倉石教授に贈られたものであることがわかる。倉石教授の蔵書は、いわば民国時代の学術史そのものともいえる。倉石文庫には、新学書、和書なども含まれ、その点でもきわめて貴重である。

夕嵐草堂文庫。文学部中国文学研究室の前野直彬教授の旧蔵書。前野教授の旧蔵書のうち、旧刊本を集めた。経史子集にわたるが、文学関係、とりわけ小説と文集に富み、明刊本を含む善本を多く有する。

両紅軒文庫。本年度、東洋文化研究所では、文学部中国文学研究室の伊藤漱平教授所蔵の書物のうち、『紅樓夢』及び李漁関連資料の受け入れを開始した。両紅の名は、『紅樓夢』最初期の印本であるいわゆる程甲本及び、元の宋遠の小説『金童玉女嬌紅記』（明宣徳刊本）にちなむ。この二点を含む、『紅樓夢』及び李漁の著作の旧刊本、その他世界各国における翻訳、研究書などからなる。本所倉石文庫には、『紅樓夢』の程乙本があり、これによって、本所に『紅樓夢』程甲、程乙の両善本がそろったことになる。また、「双紅堂」で本尊が欠けていた『嬌紅記』について、『金童玉女嬌紅記』がやってくることも、また奇しき因縁といえよう。両紅軒文庫の受け入れが完成すれば、『紅樓夢』と李漁については、原本から翻訳、研究書、研究論文に至るまで、本所に来ればすべてがそろうという状況ができあがる。

近年の中国台湾では、多くの重要な基礎的資料が刊行されている。それら資料の充実にもつとめつつ、特色ある文庫の形成につとめる。それが、本研究書図書館の進む道と考えている。横の連携を強めるための目録の充実なども継続して力を注いでゆきたいと思っているし、重要な典籍については、善本解題、影印叢書などの刊行も考えている。

ここまで書いてきて読み直してみると、どうも戯曲小説の話題に終始してしまったようにも感じられる。が、偏りすなわち特色。そういえないこともないだろう。  
(東京大学東洋文化研究所教授)

# 最近の中国と漢籍について

橋本 秀美

07年は2月18日が春節で、私は今お正月の雰囲気の中に居ます。過ぎ去った年を振り返れば、この二三ヶ月は、于丹の《論語心得》が大きな話題でした。于丹という方は、北京の某大学で映像メディア学とかいう専攻の教員をしておられるそうで、テレビ業界との関係が深いらしく、《論語》を現代風に講釈するテレビ番組をやったところ、大変な反響を呼び、DVDも本も大量に販売された、ということです。本を出版したのは、中国で長年古典文献および研究書を出版して読者の信頼最も厚い中華書局です。「心得」という書名は、《論語》を読んで私なりに感じ取ったもの、とでもいった意味で、十一月下旬から売り出して、一月中旬には既に百五十万部を売ったというから驚きです。中華書局の古典文献は、初版二千冊というのが普通です。

もちろん于丹は孤立した例ではなく、去年は易中天という人がこれまたテレビで歴史を語って、DVDも本も爆発的に売られています。ただ、于丹は《論語》であり、しかも中華書局から本を出した、というところで私も興味を持ちました。聞くところでは、易中天も于丹も、歴史や古典を引き合いにしながら、実は現代の人間関係や企業経営などの処世訓を語るのが主な内容となっているそうです。確かに、古典など殆ど読んだこともない人人を主要な対象とするテレビ番組ですから、当然と言えば当然です。ただ、その場合に引き合いに出されるのが《三国志》や《論語》であった、というのが06年の特徴と言えましょうか。

2月17日即ち大晦日の晩、中央テレビが放送した春節晩会では、「和諧」という言葉が何度も使われていました。春節晩会は、歌有り踊り有り漫才有りコント有り、という賑やかな内容ですが、かつての日本の紅白歌合戦のように、かなりの比率の中国家庭で視聴される番組です。この二三年、中国政府が提唱しているのが「和谐社会」で、経済発展に伴って過度に進む二極分化を抑えるべく各方面の政策を講じる一方で、一般的な考え方として「和諧」を強調しているものです。強者と弱者が対等に平和共存するというイメージで、日本で「和」と言われるものが、実態としては大勢への服従を意味しているのとは違います。各種のイジメ現象は日本の「和」の社会の特徴ですが、それは中国という「和諧」とは相容れないものです。

「和谐社会」が望ましいのは中国では誰にも異論が無いところですが、それを実現するのはなかなか難しく、「和諧」という掛け声も、ともすると空しいお題目や悲しい叫びのように聞こえる場合が無いではありません。しかし、

望ましい方向を目指す原則が思想として明確に立てられるということは、その実効性がいくら低くとも重要なことであり、間違いなく必要なことでもあります。これは、個人の独立性が強い中国では当然のことですが、日本のような狭い社会でも、個人が思想的原則を自ら確認する態度を普及させることができ

れば、軍部・アメリカ・やくざ・小泉のように声の大きい者に簡単に靡いてしまう傾向を抑制し、社会全体が極端に走って誰にも止められなくなってしまう事態を防げるはずではあります。教育基本法改訂や憲法改訂のような我々の死活問題でさえ、表面的には内容の議論が有っても、実際には「場の雰囲気」で何となく決まってしまうのだとすれば、人権など論じる意味もありません。

「和諧」を掛け声だけに終わらせないために、それに沿った政策が有るわけですが、思想の面でも単なる原則に止まらない豊富な内容を持った体系が、原則を支える基礎として必要とされます。かつての中国では、ここにマルクス・レーニン主義や毛沢東思想を背景として歴史的に形成された革命理想主義思想が確固として存在していましたが、現在では既に影が薄くなってしまっています。経済発展の結果、貨幣経済が大多数の人人の生活に圧倒的影響力を持つに至っているからです。この、思想が希薄となった社会に、如何にして「和谐社会」の原則を支える思想体系を維持するか、言葉を換えれば、如何にして道徳規範を打ち立てるか、が大きな課題となっています。

この場面で、伝統文化に助けを求めるとするのは自然な発想であり、それは社会的根拠を持っているという意味で有効な方法でもあり得ます。ところが、中国の伝統文化というのは一筋縄では行かないもので、前近代のいわゆる儒家的道徳思想は、近代以来、人間の平等で自由な発展を阻害する封建性のものとして根本的に否定されてきています。更に言えば、現在の中国は多民族国家であり、漢族を主として形成された儒家思想体系をそのまま国家通行の思



想とするのは無理があります。従って、伝統文化という漠然とした言い方ならば何の問題も有りませんが、儒家思想となるとどうも政治の手には負えない、ということになります。

しかし、現在の中国政府は、既に民間の儒家思想提唱を抑圧しない、封建的として批判しない、という態度を取っています。政府として提唱したり支持したりするのは問題が有るが、一部の民間で自発的にやる分には構わない、ということです。実際に、ここ数年来、伝統文化提唱という形で、一昔前なら封建的と批判されかねない倫理道徳を宣伝する民間の団体も活動しています。一方、《論語》は小中学校の教科書にも出てきますから、それを論じることは従来も何の問題でも有りませんでした。論じて誰も興味を持たないというのが以前の状況でした。現在は、道徳倫理の再構築が切迫した問題である、と一般の人人にも感じられているし、経済的余裕が出来た人たちが精神的満足感を求めようとする場合に最も手っ取り早いのが自民族古典文化であるし、そこに古典を引用しながら日常生活上の倫理道徳問題を語るという手法が与えられたので、《論語》を売れ筋商品に仕立て上げる条件は整っていた、とも言えます。こうした機運を掴んで、的確な手法で《論語》を売り出した于丹は、さすがに「映像メディア学」のプロだ、といったところでしょうか。

かくして于丹と中華書局は、恐らく、多額の収入を得て、中華書局の社員にも余分のお年玉が支給されたのではないかと私は勝手に想像していますが、中華書局の本業である古典文献の出版事業は、必ずしも喜ぶべき状況を迎えているとは言えないように思っています。それは、一般の読者の興味が薄れたということではなく、専門の学者の質が変わってきたという問題です。印刷数二千部の古典文献は、もともと一般読者を対象としているものではなく、最近ではむしろ読者の層が厚くなってきているというのが実態かと思われま。一方、本来の読者層である学者は、全体的傾向として、研究の市場経済化が進んだ結果、じっくり読書をする余裕をますます失いつつあります。競争的研究経費で本を買い、プロジェクトの成果として本を出す、という形がますます普通に見られるようになってきました。プロジェクトの経費を貰えば、期限まで



に成果を出さなければならないので、質の低い本が沢山作られます。経費の補助が有るので、自費出版のようなものですから、出版社も内容の質をそれほど問題にしない。同時に、学者たちは経費で本を買いますから、値段が高くても質が低い本でも、ちょっと専門に関係があれば、とりあえず買ってしま。競争的経費などというものが如何に馬鹿げた制度であるかは、日本の大学の先生方もよくご存知のことと思います。

一つだけ例を挙げれば、昨年中華書局から出版された《揚雄方言校釋匯證》という本は、その名のとおり《方言》という漢代の古典について、各種資料を整理して校勘と注釈を行ったものですが、校勘に使用した版本の中に「日本東文研蔵珂羅版宋刊本」というのがあります。中国の読者には何の事だかよく分からないはずですが、「日本東文研」というのは、この《明日の東洋学》を発行しているセンターが属す東京大学東洋文化研究所に他なりません。「珂羅版宋刊本」というのは、民国三年に傅增湘という学者が作った影印本ですから、もちろん中国の各図書館にも所蔵されており、「日本東文研」にしか無いものでもなければ、「日本東文研蔵」のものが特に中国の図書館に所蔵されるものと違っているわけでもありません。このような版本にわざわざ「日本東文研蔵」という帽子を被せるのは、無意味な情報で読者を混乱させるだけです。書き方として誤りです。例えて言えば、私が《広辞苑》を引用するのに、「東文研蔵《広辞苑》によれば」と書くのはおかしい、例え実際に使ったのが東文研図書室の《広辞苑》だったとしても、ということと同じことです。《校釋匯證》の編者がこのような誤りを犯した直接の理由は、編者が利用したのが《宋刊方言四種影印集成》という日本の科学研究費研究成果報告書だったからで、《影印集成》は東文研の資料を影印の底本として使ったために、「東文研蔵珂羅版宋刊本」と表記して権利紛糾が起るのを避けているのです。いけないのは、直接影印本を見ずに《影印集成》を使ったことではなく、編者が《方言》の版本について、更に言えば版本学について、全く無知だったということです。「東文研蔵珂羅版宋刊本」は一例に過ぎません。《校釋匯證》には、私も尊敬する趙振鐸先生が序を寄せており、大量の精力を注ぎ込んだ労作であることは間違いありませんが、編者は訓詁学の専門家で、版本や校勘についてはまるで経験が無いらしいのです。編者自身《前言》で、まだまだ不備の多い作品であるが、止むを得ぬ事情でこの段階で出版せざるを得ない、と説明しています。中華書局の編集者も、本来ならば明らかな問題は編者と相談して修訂すべきですが、十分に出来ていません。そして、この本にも三つの研究プロジェクトの経費が使われており、他にも出版助成を

受けています。この《校釋匯證》は、確かに利用価値の高い労作かと思いますが、研究情報参考資料集といった感じで、簡単に言えば情報が洗練されておらず、後世に伝えるに足りるものとは到底思われぬのです。ですから、《校釋匯證》を貶す必要はどこにも無く、私も有り難く利用させて頂きますが、将来このような資料を参考にしつつ、更に優れた美しい本が作られるのを期待せざるを得ません。《校釋匯證》と同様の問題は他の多くの本にも共通して見られています。

古典文献の出版数は年年増加しているはずですが、学者と編集者の古典文献に対する編集整理能力は高くなく、しかも学者は専門分野の研究成果を上げるのに追われ、編集

者も売り上げを上げるのに追われ、ということになると、なかなか明るい前途は見えて来ません。売り上げが伸びればそれでよい、という単純市場主義は誤りで、それならいっそ古典文献など止めて漫画や雑誌を作った方がよい、ということになってしまいます。質の追求が無ければ、古典文献の出版は意味がありません。当面は、大量の出版物の中に極く少数混じっている質の高いものを見過ごさないように気を付ける、といったところでしょう。どのような時代にも、優れた能力を持って、美しい本を出そうとする人は、少数ながら居るもの、と信じています。

07年2月22日

(北京大学歴史系副教授)

## 国際連携漢籍資料庫の夢

丘山 新

東洋文化研究所（東文研）が、ここ10年間に進めてきた「漢籍目録のデータベース化」と「貴重漢籍の全文画像データベース化」とを二本柱とする漢籍資料情報のデジタル化事業は、常に国内外に先駆けるパイロット・スタディー的な役割を果たし続けてきた。ここに、それらの漢籍デジタル化事業の経緯と現状、およびその経験のなかで学んだことなどを記しておこう。

### 【漢籍目録データベースの企画】

東文研で私が漢籍に関するデータベース化事業を始めた10年ほど前、自然科学・理工系の分野だけではなく、人文社会系の分野でもさまざまなデータベースが既に構築され始めていた。そして和書や洋書に関する図書目録のデータベースに関しては、個々の研究機関のものだけでなく、学術情報センター（現・国立情報学研究所）が中心となり、非常に便利な全国図書目録データベースも構築され、公開されていた。しかし、漢籍に関しては以下にふれるように二つの問題があり、そのいずれに関しても国内外のさまざまな学会や協議会で長年にわたってさんざん議論はされてきたものの、合意ができるようなよい智慧はなかったために、漢籍目録のデータベース化は実現の目途が立っていなかった。

東文研にはおよそ六万点におよぶ漢籍が収蔵されており、昭和四十八年には冊子体『東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録』が刊行されていた。また当時は、文字コードの問題で、全国図書目録データベースには収録されていなかった現代中国書の目録データベースを、東文研では岡本さえ教授が中心となって全国に先駆けて構築し、公開していた。この現代中国書のデータベースのデータは、後に東

洋文庫の目録データベース構築に際しても提供され、さらには国立情報学研究所の全国目録データベースに現代中国書をも収録する際に、大いに貢献した。

ところで、私自身は仏教学を専門としていて、いわゆる漢籍とはほとんど関係がなく、漢籍目録をデータベース化するような事業など、私に与えられた責務でもなかったが、当時のさまざまな状況の中で、私は現代中国書に続けて、なんとか工夫をして漢籍目録をデータベース化したいと考えた。大切なことなのに誰もやらないなら、自分でやっしまおうという、私のつまらぬ好奇心だけが最初の動機であった。私は漢籍、特に書誌学の専門家でもなく、また東文研にはコンピュータの専門家もおらず、私自身もコンピュータの専門的知識も持ち合わせていなかったが、データベースというものは、一人の力で創るものではないし、さまざまな分野の人たちのアイデアや智慧そして技術とで創っていくものだから、企画さえしっかりしていれば、どうにかなるものだ。また、幸か不幸か、私は当時の漢籍データベースに関する国内の各種の会議には一切関係をしていなかったため、「データベースというものは生き物のようなもので、固定化された冊子体の目録とは違い、内容的にもどんどん修正できるし、そして技術の発展に伴って改良していける。従って、将来の技術的発展にも対応して移行しうのような、現在考える最善の方法と最新の技術をもちいて、とりあえず創り始めることが肝要だ」という独自の判断のもとに、事業を始めることにした。

問題点は以下の二点であった。第一にはフィールドの問題であり、一般の書籍とはまったく異なる漢籍の書誌情報、つまりどのような項目・情報を入力するかの問題である。

このフィールド問題に関しては、原則としては、できるだけ詳しい情報を採用することとした。幸い、東文研の場合は、冊子体『東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録』作成のために作った詳しいデータシートを利用することができた。それは研究に有益であるというだけでなく、将来的に国内外の研究機関や図書館と漢籍連合目録を構築することを視野に入れると、削除はいつでもできるのだから、できるだけ多くの項目を入れておいたほうが便利であると判断したからである。

第二には、どの漢字コードを採用するかの問題である。私たちは、国内的な利用だけではなく、国際的にも利用されることを考え、また将来的な国際連携を視野に入れ、漢字コードとして当時国際的にもっともよく利用されていた台湾版漢字コードBig-5を採用することとした。肝心なことはコンピュータの技術は急速に進歩していくのであり、漢字のコード問題に関しても、当時はまだ実用化されていなかったユニ・コードがいずれ普及した段階でも、それを視野に入れて、データベースの構造をユニ・コードに変換しやすい設計にしておけばよい、と考えた。実際、東文研の漢籍目録データベースは、2005年4月からユニ・コードへと順調に切り替えることができた。なお、ユニ・コードにも入っていない漢字（外字・僻字）に関しては、当初から『今昔文字鏡』の支援を頂いている。

因みに、当時、日本における漢字や漢籍のコンピュータ処理の研究で指導的立場にあった京都大学人文科学研究所の勝村哲也教授は、私の計画内容を聞き、「もし私が立場上のしがらみがなく、自由な立場にあれば君と同じことを考えるだろう」と語ってくださったが、このことは独断で突っ走ろうとしつつも、些かの不安を感じていた私にとって大変な激励となった。

### 【漢籍目録データベースの実現】

さて、1997年の秋、私は分厚い『東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録』一冊を抱えて初めて台湾へと向かった。漢字コードや外注費を考えると、台湾との合作が最善だと判断したからである。当時、台湾でも漢籍目録のデータベースは実現していなかったためか、台湾大学・歴史系の呉密察教授に紹介された漢珍公司も、最初は私の企画に対して半信半疑のようであった。しかし、翌1998年に科学研究費補助金（研究成果公開促進費）を交付され、いよいよ台湾との合作事業が始まった。このような経緯を経て、1999年4月から国内外に先駆けて本格的な漢籍目録のデータベースの公開が始まり、冊子体目録に収録された漢籍の目録情報は基本的に四年間で入力を終え、その後は冊子体目録刊行後に購入した漢籍の情報を遡及入力してきている。

因みに、この作業には台湾大学の図書館や国家図書館の

漢籍関係者がさまざまな意見を出してくれたが、彼らも翌年から東文研の漢籍データベースを基礎に、台湾の主要研究機関の漢籍連合目録を構築し始めることとなった。そしてその後すぐに、台湾から国際連携の申し入れを受けていたが、これも2006年に実現している。

さて、東文研が漢籍目録のデータベース化を実現して公開し、二年後、京大人文研（漢字情報研究センター）から人文研でも漢籍目録をデータベース化したい、また全国漢籍目録のデータベースも構築したいので協力してほしいとの申し入れを受けた。東文研にもさまざまな意見はあったものの、全国版を構築することは中国学の為であるとの判断から、東文研のデータを提供するとともに、情報学研究所、人文研、東文研の三者が幹事機関となり、全国漢籍データベース協議会を設立した。そして全国漢籍目録データベースは2001年からの構築が始められ、現在に至っている。

### 【貴重漢籍全文データベース】

さて、漢籍目録のデータベース化が軌道に乗ってきたので、私は2003年から東文研の所蔵する貴重漢籍を全文画像としてデジタル化し、ネットワーク上で公開する企画を立てた。目的は二つある。一つは、そもそも漢籍は研究資料としてだけでなく、文化財的にも貴重なものが多い。一般の研究者にはできればデジタル化して公開し、実物はより良い環境に保存し、保護するために。二つには、目録データベース同様に、漢籍善本に関しても国際連携を進め、巨大な《国際仮想漢籍善本資料庫》の構築を目指すためである。

この事業は、主として2004年度からの科学研究費補助金（基盤A）「アジア古籍電子図書館の研究」によって順調に進められ、既に東文研で指定された貴重漢籍約500点すべてがデジタル化されネットワーク上で公開されており、現在はさらに貴重漢籍として指定されたもの以外の漢籍も順次デジタル化されつつある。この間、東文研図書室に2005年度から「特別教育研究事業費」が交付されて書庫内に特別貴重書書庫が築かれ、その予算の一部による漢籍のデジタル化も進められており、来年度初めには東文研による漢籍の全文画像公開数は1500点近く、コマ数では30万コマを超えることになる見通しである。

この漢籍全文画像データベース事業には、目録データベースとは異なり、デジタル化した資料の公開に関する大きな問題がある。私個人の考えでは、これを利用して出版するなどの不正利用を阻止する工夫を加えることによって、基本的には全面公開すべきであると考えているが、東文研内には別の意見もあり、現段階では一部に閲覧制限がかけられている。これは、貴重資料を所蔵している国内外のいずれの研究機関にとっても「深刻な」問題であるようだ。

なぜなら、一方では国内外の多くの漢籍所蔵機関が貴重資料の保存のためにデジタル化を進めつつも、他方では一部の研究者には、有り体に言えば「自分の所蔵品は見せたくない」という滑稽な心理が働いている(らしい)からである。

いずれにせよ現段階で、貴重な漢籍全文をネットワーク上で本格的に公開することについて言えば、東文研の事業は国際的にもきわめて先進的なものであり、国内外の研究者たちからも東文研の「勇断」は非常に高く評価されている。私としては、貴重な漢籍を所蔵するあらゆる機関に対して、「一を出して、百を得る」の精神で、積極的に所蔵漢籍をネットワーク上で公開するよう要請したい。

### 【余話】

目録データベースにもはや障害はない。これからの課題は、いっそうの付加価値を加えていくことであろう。そもそも大学などの研究機関が作るデータベースの価値は、研究者が研究に基づくアイデアを付加価値としてどれほど加えられるかで決まるのであるから。

全文画像データベースには、現在のところ上記の問題があるが、これも公開する機関が徐々に増加してくれば、研究者の意識も良い方向へ向かうものと信じたい。そして近い将来には、必ず国際的な仮想漢籍善本資料庫が実現するであろう。

データベースは、まさに生き物で、十年前に生まれた東洋文化研究所の漢籍のデータベースは今も成長し続けています。このデータベースを育ててくるにあたって、実に多くの方々からお力添えを頂いてきました。また併せて、国際的にも先進的な事業に誇りと情熱をもって日々の作業を進めてきてくれている非常勤職員の皆さんに、この紙面を借りて、心より感謝します。

(東京大学東洋文化研究所教授)

## センター便り

### ・新規データベースの公開

東洋文化研究所所蔵雙紅堂文庫全文影像資料庫 (<http://hong.ioc.u-tokyo.ac.jp>) 雙紅堂文庫は長澤規矩也氏旧蔵書、明清時代の戯曲小説類約3,000冊から成る。そのうち一部の漢籍はアジア古籍電子図書館・漢籍善本全文影像資料庫内で既に公開済みであるが、平成19年4月より小説類を順次公開していく計画である。

### ・後期主な活動

2006年10月19日 (社) 日本記者クラブ センターセミナー＝アジア・バロメーター公開シンポジウム共催アジア・バロメーターから見る中国の市民意識と対外認識(2006年度世論調査分析)をテーマに行われた。活発な質疑応答がかわされ、盛況の裡に終了した。

2006年12月15日 山上会館 アジアバロメーター運営委員会主催

2007年1月26日 神戸大学経済研究所 4 センター長会議参加

2007年1月29～30日 山上会館 Third Meeting of Promotion of East Asian Studies ～Network for East Asian Studies～開催 参加国ASEAN+3

### 所外委員

西郷 和彦 附属図書館長  
(大学院新領域創成科学研究科科長)

Ch'en, Paul Heng-Chao

大学院法学政治学研究所・  
法学部教授

川原 秀城 大学院人文社会系研究科・  
文学部教授

泉田 洋一 大学院農学生命科学研究科・  
農学部教授

澤田 康幸 大学院経済学研究所・  
経済学部助教授

村田雄二郎 大学院総合文化研究科・  
教養学部教授

姜 尚中 大学院情報学環・  
学際情報学府教授

丸川 知雄 社会科学研究所助教授

杉本 史子 史料編纂所助教授

### 所内委員

鈴木 董 教授 西アジア研究部門、委員長

関本 照夫 教授 汎アジア研究部門、所長

田中 明彦 教授 汎アジア研究部門

真鍋 祐子 助教授 東アジア研究部門 (第一)

丘山 新 教授 東アジア研究部門 (第二)  
(兼)センター比較文献資料学

尾崎 文昭 教授 東アジア研究部門 (第二)

永ノ尾信悟 教授 南アジア研究部門

榎屋 友子 助教授 西アジア研究部門

(兼)センター造形資料学

玄 大松 助教授 センター比較文献資料学

### センター長

小川 裕充 教授 センター造形資料学

### センタースタッフ

小川 裕充 (おがわ ひろみつ) センター長・  
センター造形資料学分野教授 中国美術史

丘山 新 (おかやま はじめ) センター比較文献  
資料学分野教授 仏教思想

榎屋 友子 (ますや ともこ) センター造形資料  
学分野助教授 イスラーム美術史

玄 大松 (Hyun, Daesong) センター比較文  
献  
資料学分野助教授 国際政治学

保城 広至 (ほしろ ひろゆき) センター造形  
資料学分野助手 国際政治学

笠井 伊里 (かさい いり) 業務係長

東京大学東洋文化研究所附属東洋学  
研究情報センター報 第17号

発行日 2007年3月30日

編集・発行 東京大学東洋文化研究所

附属東洋学研究情報センター

〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番地1号

電話 03-5841-5839(直通)

FAX 03-5841-5898

E-mail [ricas@ioc.u-tokyo.ac.jp](mailto:ricas@ioc.u-tokyo.ac.jp)

URL <http://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp>